第4回　国際協力セミナー　報告

環境省のお仕事
－日本とインドネシアの経験を語る－

講師：藤塚哲郎氏
（環境省　水・大気環境局　地下水・地盤環境室、 元インドネシア環境省　環境政策アドバイザー）
日時：2006 年 10 月 10 日（火）17：00－19：00
参加者：15 人

議事：
- 学生の自己紹介
- 藤塚さんの自己紹介

　→三つの省を経験（かなり稀なケース）　その中でも環境を壊す「建設省」と環境を守る「環境省」を経験するという興味深い経歴の持ち主

－インドネシアと日本の環境省の特徴
- 日本の環境省（５局２部）　予算が非常に少ない　尚且つ激務
- インドネシア環境省（７局）

　→　女性の割合が 40%と高い
　→　予算は 4 千億ルピア（約 57 億円）←ＰＰＰ（購買力平価）に直すと大した額
　→　優秀な非常勤職員が多いのも特徴

－インドネシアと日本の環境法の相違
- 法令は双方とも一緒のレベル

　→では、何故インドネシア国内では公害がなくならないのか？
　　→法律は確かにたくさんあるが、実施が見られない。また、各省間の連携も拙い。

－インドネシアと日本の環境省の業務形態

● インドネシア

→トップダウンが強い（上がノーと言ったらノー、イエスといったらイエス）

→人事異動が長期間（大臣が変わればその下に働く人間もゴロッと変わる）

→何故か？

→何故なら、気に入った人材を手元に配置しておいて、仕事をやり易くしたいから。（仕事は人に附いてくる）

→勤務時間は長くない

→官僚はエリート。故に、自分の手は汚さない。

→子供を仕事場まで連れてくる（ワイワイ騒がしい）

● 日本

→勤務時間がひたすら長い（子供と一緒にご飯を食べることが出来ない）

→特に、法律を作っている時は朝帰りが多い

● 藤塚さんがいままでされてきた仕事

→グリーン購入法の作成（2001 年に政令）

※ 仕事や議論には非常に疲労したが、それを達成したとき、また法律の効果が現れたときの達成感は何ものにも代えがたい。

→インドネシアでは、企業に対して環境意識を高めるために、エコラベルや環境報告書の作成に努めた。

→現状として、インドネシア環境省職員自体の環境に対する意識が低かったので、そこから刷新する必要があった。例えば、non-organic と organic のゴミの分別をやらせるなどを行った。また、エリート意識を拭いさることもしなくてはいけなかった。

● 質疑応答

Q:インドネシアと日本の環境省のパフォーマンスの違い

A:インドネシアと日本では国民性が違う。また、インドネシアでは環境省にのみならず、官僚といったものは日本以上にエリート意識がある。また、インドネシアは縁故主義や、汚職が蔓延っているため、それらも環境に対しての弊害となっている。

Q:何故インドネシアでは環境に関する法律が実行されないのか？
A:各国のせめぎ合いが邪魔している背景がある。例えば、ドイツの Eco tech 100 という基準を導入した例を見るように、明らかに日本の基準よりも低い基準を採用している。日本の高い基準を設けてしまうと、その基準をパスできるプロダクトを企業は生産できなくなってしまう。そうなると、インドネシア政府が目指す「中国との差別化」といった目標の足枷となってしまうおそれがある。

●参加者の感想から
-開発途上国に環境対策を持ち込むことの困難さがひしひしと伝わってきました。
-環境に特化したお話かと思っていたが、話に臨場感があり、大変惹きつけられた。国際協力、環境省、インドネシアの環境問題が理解しやすく、興味深かった。
-環境省の仕事の様子がわかったことがよかった。
-価値観の違いが環境に対する捉え方に影響するという点が印象的だった。
-一秒たりとも飽きることのない興味深いお話をありがとうございました。本っ当に面白かったです。実務経験者ならではの意見はやはり非常に貴重で、さまざまな点で鼓舞されました。自分がそのような仕事(激務)ができるかはわかりませんが。。。
-インドネシアの言及については単純になるほどと自分に直接関係ないと思われる事柄でも楽しく聞くことができました。一方、インドネシアだけにとどまらない問題については、今後の研究の動機付けに寄与するものとなりました。

議事録担当：高橋大輔（M1）